

## 第48回日本成人病(生活習慣病)学会学術集会 / 第42回日本免疫学会学術集会

～ *H. pylori* 除菌成功率～

## 糖尿病患者では18%低い

糖尿病患者では抗菌薬の効果が低減し、慢性感染の遷延化を起こしやすいといわれているが、糖尿病患者における *Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 除菌成功率に関しては、確立した見解が得られていない。そこで、新潟大学大学院血液・内分泌・代謝内科の堀川千嘉氏はメタ解析を実施。その結果から、糖尿病患者は非糖尿病患者と比べて、*H. pylori* 除菌成功率が18%低いことが分かったと第48回日本成人病(生活習慣病)学会学術集会(1月11～12日、会長=東京慈恵会医科大学内科学講座消化器・肝臓内科/内視鏡科・田尻久雄氏)で発表した。

## 1型、2型とも有意に低下

*H. pylori* は、胃潰瘍や胃がんをはじめとする上部消化管疾患の主要な危険因子である。最近のメタ解析では、糖尿病患者は非糖尿病患者と比べて、*H. pylori* 感染者が1.3倍多いと報告されている。

しかしながら、糖尿病患者と非糖尿病患者で *H. pylori* 除菌成功率が異なるかどうかに関しては、一定した見解が得られていない。

そこで堀川氏らは、糖尿病患者と非糖尿病患者で *H. pylori* 除菌成功率との関連性を明らかにすべくメタ解析を行った。

同氏らは、MEDLINE、EMBASE

を用いて「糖尿病」および「HP」に関連するキーワードを抽出し、糖尿病患者と非糖尿病患者の各人数とそれぞれの除菌成功人数が記載された文献を採用し、各研究の糖尿病患者と非糖尿病患者の除菌成功率の差について統合し、その値を変量モデルにより算出した。

採用文献は8件で、解析対象者は693人、うち273人が糖尿病患者であった。糖尿病患者は非糖尿病患者と比べて、*H. pylori* 除菌成功率が18%低いことが分かった(95%CI -30～-5,  $P=0.003$ )。また1型、2型糖尿病患者のいずれにおいても、*H. pylori* 除菌成功率は非糖尿病患者に比べ有意に低下した[それぞれ-12%(95%CI -43～-18),  $P=0.03$ , -5%(同-42～-9),  $P=0.009$ ]。糖尿病型の違いにより除菌成功率に有意な違いは認められなかった。

同氏によると、糖尿病患者の *H. pylori* 除菌成功率が低い理由として、末梢血管障害による胃粘膜障害や抗菌薬の吸収不良、抗菌薬のグリコシル化による血漿蛋白質の結合減少が考えられるという。

同氏は同研究の限界として、採用文献数が8件と限られていること、糖尿病罹患期間や重症度、処方された血糖降下薬の量などでマッチングを行った研究が見られなかった点を挙げた。今後については「糖尿病の

コントロール状況の違いが、*H. pylori* 除菌成功率の低下に影響を及ぼ

すか否かについて、さらなる検討が求められる」と述べた。

## ～大豆摂取によるエクオール産生～

## 生活習慣病予防に寄与する可能性

大豆イソフラボンの摂取により、ダイゼインの腸代謝中に生成されるエクオールは、健康維持の他にも抗酸化作用など、さまざまな効果が期待されている成分である。東京医療保健大学大学院の塩見卓也氏(同大学・神田裕子准教授、豊田元教授指導)は、大豆摂取によるエクオール産生について、食事の見直しにより、生活習慣病予防に寄与する可能性がある」と発表した。

## 更年期症状に影響

塩見氏らは、エクオール産生と生活習慣病症状の関連性を明らかにすることを目的とし、血中・尿中イソフラボン量を測定するとともに、大豆イソフラボン摂取状況についてのアンケートを基に評価、検討を行った。対象は、同意が得られた若年者(大学生)および後期高齢者(75～90歳)とした。

更年期症状を有する女性を対象にした場合、エクオール産生者は約40%であった。対象者における精神症状の有訴割合は、「日常生活に影響する程度」がエクオール非産生者約32%に対して、エクオール産生者約18%、「日常生活への影響がかなりある」者が前者の14%に対して後者は0人であるなど、エクオール産

生と症状の程度に関連が見られた。

## エクオール産生者は若年で少なく、高齢になるほど増加

後期高齢者の血中イソフラボン濃度の検討では、10人中9人がエクオールを産生しており、高齢になるほどエクオール産生者が増えている傾向が見られた。

若年者に関しては、エクオール産生率は低く、男性で3割、女性で約1割であった。食事調査によると、1日当たりの大豆イソフラボン摂取量は、若年者ほど少なく、疲労感などを多く感じる傾向も認められた。

若年者へのイソフラボンサプリメントによる栄養介入では、サプリメント摂取による尿中エクオール量の変動はほとんど見られなかった。

今回の結果を受けて、塩見氏は「更年期症状とエクオールに関連性が認められ、また高齢になるほどエクオール産生者が増えていることが明らかになった」とまとめた。

また、エクオール産生者は日本人の約半数ほどしかいないといわれていることから「大豆摂取によるエクオール産生については、食事の見直しにより生活習慣病の予防に寄与する可能性が示唆された」とし、今後の研究への期待を示した。